



最新設備導入・カウンセラー配置で信頼性を確保

レーシックの健全な普及に貢献したい

名古屋アイクリニック

院長 中村 友昭



名古屋市熱田区にある医療法人REC名古屋アイクリニックは、近視・乱視などを治す屈折矯正手術・レーシックで高い実績を誇る。最近では世間にも広く認知されつつあるレーシックについて、同院の中村友昭院長に、手術を取り巻く現状や、今後の課題などを聞いた。

——まず、レーシックについて教えてください。

中村 レーシックとは、まず角膜の上皮にフラップと呼ばれる蓋を作り、エキシマレーザーを使用して角膜を切削する手術法のことです。これにより屈折率を弱め、近視・乱視などを矯正していきます。その歴史は、手術に使われるエキシマレーザーが開発されたことから始まりました。現在、誕生から二十年ほどが経過したところですね。

——開発当時から比べると、やはり手術法なども変化している

中村 そうですね。最初は単純に角膜にスジを付けた程度のものでしたが、レーザーで平滑な面を削れるようになり、近視や乱視を矯正できるようになっていきました。より精度の高い手術を求めて技術革新が進んだ結果、現在では、近視や乱視だけでなく、不正乱視や人それぞれの目の歪みの除去を行うなど、オーダーメイド感覚の治療が展開されるようになってきています。

——安全性に関する技術も進歩していると。

中村 もちろんです。今では瞳孔の動きを認識し、それに連動してレーザーを自動調整する「アイトラッキングシステム」が導入されています。これには軍事ミサイルの追尾システムが応用されています。それ以外にも、光彩によってレーザー照射の正確な位置を判断する技術など、さまざまなシステムが開発されています。

——先生が近視矯正手術に着目された経緯は。

中村 元々、私の専門分野は角膜移植やドライアイなどの角膜疾患でした。十年ほど前からエキシマレーザーのことはすでに知っていました。当時「すごいレーザーが出たよね」と話す程度でした。その後、当時勤務していた病院の部長の指示で海外視察に行き、そこではじめて実際にレーシックを見たわけですが、「この治療はすごい。これからはレーシックの時代になる」と思いました。早速日本へと持ち帰り、治療を始めるようになりました。僕がはじめたのは一九九九年一月でした。日本で実施しているのは、

まだ限られた施設だけでした。

——最初は信じられないという反応も多かったのでは。

中村 日本で近視が治るのかという反応が多かったですね。また、日本は諸外国と比べて安全性を確保するための規制が厳しく、先進医療の浸透がどうしても後手にならざるを得ません。だから、レーシックの技術も一般の方々に浸透するまでにかかり時間がかかったという部分があると思います。例えば、アジア諸国を見渡してみても、韓国やシンガポールなどの方が技術的には先進的だと思えます。ただ一方で、日本ではすでに諸外国が行った先進医療の問題点を、あらかじめ把握してから医療技術を導入していくわけですから、その分、高い安全性を確保できるという良い側面もあるのだとも思います。

——今後は技術革新と合わせて、さらなる認知度の向上、正確な情報の伝達なども課題だといえますね。

中村 ええ。医療業界は広告規制の問題もありますので、一般の

方々に正確な知識をお伝えしていくという側面もあります。ただ、今ではインターネットの普及とともに、日本でもレーシックの認知度は確実に向上しています。実際に来院される方も、ホームページを見られた方が全体の三割ほどを占めています。最近では、レーシックと聞けば多くの方が知っていますよね。だいぶ状況も変わってきたかなと感じます。

——患者側の負担軽減のため、最近では「VisuMax(ビジュマックス)」を日本初導入されたとうかがいました。

中村 これもひとつのレーシックの進化系です。先ほど、レーシックではフラップという蓋を作ると言いましたが、この蓋は「マイクロケラトーム」と呼ばれる、いわば大工さんが使うかんなのような形状の精密な刃物で作っています。その際、眼球への圧迫感や恐怖感を感じるという患者さまもいらっしやうたんです。そこで、フラップもレーザーで作ってしまおうと考案されたのが、この「VisuMax」です。これにより、

——そんな技術革新の一方で、インフォームドコンセントも重要なテーマですね。

中村 ええ。当院では専門の方ウインセラーを置いて、メリットとデメリットをすべてお伝えするように努めています。治療の効果を誇張せず正確に伝えることがなによりも大切です。近視の矯正は、失明するから必ず手術が必要だということではありません。それだけに、患者さまにじっくりと説明する機会を設けることが重要です。そして、こうした地道な行動の積み重ねが、レーシックの信頼性の確保と、さらなる認知度向上へと繋がっていくのではないかと考えています。

——ありがとうございました。